

Title	六月例会の記：盛況だった
Author(s)	宇野
Citation	天界 = The heavens (1935), 15(172): 393-395
Issue Date	1935-07-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/167068">http://hdl.handle.net/2433/167068</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

——盛況だった——

## 六月例会の記

十三日の新聞に「天文講演と天體觀測會」<sup>1</sup>として講演題目及び觀測天體名を並べ、協會六月例会豫告が相當詳細に出てゐた。十四日朝には大阪市へ隕石が落下しその記事が夕刊に出た。十五日例会當日、曆の上では既に梅雨に入つてゐるが朝から快晴絶好の例会日和、午後五時過ぎから暑さを物ともされない熱心な諸氏が續々會場花山天文臺に見え掛けられる。テニスコートの邊りから銀白に輝く雄壯なドームを仰ぎ、子午線館や太陽館を眺める人人、本館内に掲げられた種々の畫や寫眞を見廻る人人、本館屋上から山科や洛北の眺望を恣にまゝにする人人、自動車は何臺も何臺もエンデンの唸りを上げて登つて來て人を運び、時刻の迫ると共に人數は次第に増へる。

六時には天文講演の開かれる圖書室が百數十名の人でぎつしり詰る。この室は南側が窓で東と北側は天井まで本棚になつてゐて外國の書物が美しく並べられ室内は餘り廣く無い。それでも例月なればゆつくり置かれた椅子に空席があるのに今日は講演席の直前から横まで椅子を詰めて後方に立つてゐる人は廊下に溢れ出る位で近來にない大盛會である。六時卅分池田政晴氏の挨拶により講演にうつる。

○大阪隕石に就て 柴田理學士 前日大阪市へ落下した隕石調査の爲、朝から落下現場や大阪測候所へ御出張になり御調査の上數分前に天文臺に御歸りになられた柴田先生は、プログラム外の特別講演として綿に包まれた該隕石を手を生々しい調査談をせられる。事件が昨日の事であり前夜の夕刊で一同が知つてゐるところへ現物を前に置いてその調査談をされるので一同固唾を呑んで興味深く傾聴する。新聞には隕石がコンクリート中に一握も喰込み技手が金槌で掘起したとあつたが、事實は唯表面が少し焼けた様に褐色になつてゐただけで疵は付いてゐなかつたとの事、発見者は建築場の大工で拾ひ上げた時は未だ熱があり上部は硬かつたがコンクリートに接觸してゐた下部は軟かく釘で突くと凹んだとの事等新聞記事のデマと新聞に載つてゐなかつた重

大な事柄を話される。落下の際發すべき光、音を見聞した者が無く天文學的な實經路の研究が出來ず隕石に就て分析的に御研究との事である。しかし重さが甚だ軽く色も黄褐色で果して、隕石であるか疑問であると言葉を結ばれた。

○月の明るさに就て 山本一清博士 二十八日餘りで明暗を繰返し人類社會に大きい影響を與へてゐる月の明るさが太陽や恆星と比較してどれ程のものであるか、月齡の進むに従つてその明るさはどの様に變化するものであるかを光級と光量の上から數字を擧げグラフで示し詳細に説明される。満月前後三四日の月の明るさは甚だ明るくグラフで示すと直線の山形となるが、新月に近づくに従ひ甚だ暗くなりその日々の變化は甚だ不規則である事。表面に複雑な凹凸があり濃淡のある月は單なる反射の法則に依つて理論的に計算するのは到底不可能である事。月の明るさから地球の反射率が解る事等。如何に手近な點に未だ未だ大きい重要な問題が残されてゐるかを語られる。月齡による月の明るさのグラフは何れ「天界」に掲載されるとの事である。

○二重星「クルーゲル第六十番星」に就て 稻葉理學士 稻葉先生の御講演は極めて珍らしい、豊かな御體を現はされにこやかに笑を湛へつゝ靜かにゆつくりと口を開かれる。精密な測微機と相當口径の屈折機を要する爲一般アマチュア内では觀測もされず、文獻も少ない二重星に就て、二重星とは一體どんなものであるかといふ一般的な事から、「クルーゲル六十番星」の名前の起り、その觀測の歴史を順序よく黑板に圖示され數字を擧げて話される。伴星の位置の變化から軌道が解り、その星迄の距離が解る事によつて軌道の大きさ、二星の質星が解り、空間の運行も解ると御自身の觀測より計算され求められた數字を説明される。この二星が M 型であり人間にたとへばもうよばよばの老人で二人仲よく共に白髮の生へる迄の生活を送つて來たものであると笑はせられ、スペクトル型の記憶の爲に Be A Fine Girl Kiss Me Now. といふ言葉の紹介をされ一同を欣ばせ、長時間の御講演だから解り易く二重星に就ての關心と興味を起させ御講演は終る。

○標準時に就て 水野副會長 室の時計は八時を示し屋外はようよう暗くなり月が東南の空にその麗姿を現はす、豫定外の補缺講演を一つ大急ぎでと言

はれながら、岡山より御出席になられた水野千里氏が立たれる。氏の講演を初めて聞く人は黑板に書かれた東亞天文協會副會長の肩書にどんな難かしい話が出るのかと静まると、先づ机の上に持出された珍妙、非常時バツグ變形風呂敷の説明に初まり、自分の服裝が春夏秋冬を兼ねてゐると茶色の上衣、白い夏のチョッキ、黒い冬のズボンを一々引張つて説明され一同をワツと笑せられる。笑聲の納まらぬ内に黑板に大きく春夏秋冬と書かれ四季の話から月、日、時へ話を持つて行かれる。同じ日本人でも本州と臺灣と南洋東部、中部に住む人を今直ぐ集めて時計を調べると一時間づゝちがつてゐると云ふ様な話し方で経度による時刻の變化、日付變更線等を話される。前列に並んでゐる中學生諸君が大喜びである。

八時卅分講演は終り、直ちに卅糎屈折鏡で觀望が開始される。ドームの巨口が南天に開いて秋の様に澄んだ空の月、木星、火星等を順次觀望し、屋上では中村氏彗星搜索機が二重星を巡つてゐる。來會者に充分の満足と興へて午後十一時この六月例會は大盛況裡に閉會された。(6. 18 宇野)

## 七 月 例 會

七月13日夕、この日期待された納涼會も朝からの雨模様のため、來集した人々は顔馴染の會員約20名、多くは京都支部の會員達であつたが大阪より臨席された熱心な方々もあつた。三伏の暑さを忘れて涼風を入れながら、一同落付いた氣分で 山本一清先生の『平石時光の天文學』を聴く、先生はつい最近彦根の城下で獨歩の業績を遺した一天文學者平石時光(1696—1771)を發見されるに及び、屢々その遺業を尋ねて同地へ出張され、相繼いで莫大な且貴重な資料を發見され目下之等の資料につき分類と整理研究の途上であり、天文と數學、殊に曆術への偉業は實に驚異と敬服に値するもので、尙この外、多方面の學術的の手記・著作等が續々發見されてゐる由である。席上には精密な天文分野之圖や、手記・年表等を並べられ、聴く者はこの深い興味と今後の先生の研究結果への盡きざる期待と關心とを持つて、誇るべき碩學の遺業を偲び、夜更くるまで相語り合つた。曇天のため觀測は中止する。(高城記)